

ピル生成の際にかなり苛酷な摩擦により、摩耗を伴うことの多いヒジの部分とその作用が少ない身ゴロの部分ではピルの構造にかなりの差異があることが分かる。ピルについて実験室における試験においてもこれらのことを考慮に入れ条件を選ぶことが必要であり、このことについての検討を行なった。

B— 3 被服におけるピル構造について

大阪市大家政 田中 道一
○広田 輝次
国井 輝子

1. 被服着用によって生ずるピルの状態は、その着用部分によって外界からの作用する力が異なるために、いちじるしく異なったものとなる。したがって被服地のピリング試験においてもその製品の使用目的を考慮に入れて、これに適した条件のもとで行なわれねばならない。しかしながら、今までこれらの関係について述べたものは少ないので、本研究は被服着用により発生するピルの状態を測定して、ピル生成の条件が発生状態に及ぼす影響についての知見を得るために試験を行なった。

2. 試料としてはアクリル繊維平みセーターを主として用い、着用後に発生するピル中、異なった作用をうけたと考えられるヒジ部分と前身ゴロの二個所で生成したピルの状態とその構成について測定を行なった。

3. その結果、ヒジ部分のピルを構成する繊維の平均長は身ゴロの部分のピルに比べて短かく、繊維数は逆に多い。また、繊維長分布はヒジ部分においては繊維長の短かいところで極大を示すが、身ゴロ部分のそれは分布が一様である。布組織と結合する繊維数は両者の間ではほとんど差異がなかった。